



安城特別
支援学校の1年

企業への就職に挑んだ安城市の安城特別支援学校高等部三年生のもとに、続々と内定のうれしい通知が届いている。だが就職はゴールではなく、通過点。長く働き続けるには、本人の努力とともに周囲の理解や手助けも必要だ。

定着支援

①

高等部進路指導主事の説田智洋教諭は八月下旬、今春卒業した男性(仮名)が働く西三河地方の運送会社の物流センターを訪ねた。「急に集中力が落ちていて、仕事にも支障が出ていて、どうしたものか…」と卒業生の指導担当者である社員の報告に、説田教諭の表情が曇った。

「何か困っていることがあるの?」。説田教諭が問いかけると、卒業生の男性は少しずつ話を始めた。友人の人間関係のトラブルに自身も巻き込まれるのではという不安が、仕事にも影響していることが判明。製品を五十個ずつに仕分けする作業にも苦勞していると分

教諭が卒業生訪ね、相談



卒業生から不安を聞き取る説田教諭(左)=西三河地方の運送会社で

かった。説田教諭はトラブルへの対処法や十個ずつ印を付けて数える方法などを提案し、「困ったら学校に連絡して」と二人で問題を抱えないよう促した。会社側にも対応を説明し、保護者とも連絡を取った。「仕事への定着には、卒業後の三年間が特に重要だと考えている」と説田教諭。八月と二年目の夏に、卒業生の職場を訪問するほか、電話連絡も取る。特に五月の大型連休明けは気が緩んだり、体調を崩したりしがち。「様子をつかむことで、職場や家庭でも早めの対応を取ってもらうことにつながる」という。今年には新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、五月別の訪問ができなかった。八月に説田教諭と元担任らが手分けをして職場を回ると、問題が深刻化している卒業生もいた。説田教諭は「やはり五月の訪問には大きな意味があると再確認した」と力を込める。

別の卒業生が働くホームセンターからは「何度指導しても、マスクが着けられない。来店客からもクレームが入った」との相談が寄せられた。「言葉で説明するだけでは理解しづらい。感染不安が広がるなか、マスクを着けていないことが周囲にどんな印象を与えるのか。着けた人、着けていない人のイラストを描き、セリフを書き加えながら話し合い、分かってもらった。「どうすれば仕事かスムーズに進むか。企業側に障害の特性を理解してもらいながら、指導の仕方や接し方を一緒に考えることが必要」と説田教諭は話す。卒業後も学校の支援は続く。